医療安全情報 2017 年 9 月号　　〔総数 11 件〕

サービス推進室

サービス推進室では、医療事故･訴訟等に関する記事や医療安全に役立つ情報を、ニュース配信を行っている会社から提供を受けて、「医療安全情報」として提供しています。

おたふくかぜによる難聴と思われるケースが 2 年間で336人

おたふくかぜの合併症で難聴になった人が、2015、16年の2年間で少なくとも336人いることが6日、日本耳鼻咽喉科学会による初の全国調査で分かった。予防接種で防げた可能性があるとして、原則無料の定期接種の対象とするよう国に求める。学会が全国の医療機関を対象に調査し3536施設から回答を得た。336人が難聴になったと診断され、詳細が判明した314人の約8割に当たる261人が、日常生活に支障を来す高度難聴または重度難聴だった。両耳とも難聴となった14人のうち11人は、補聴器を使ったり人工内耳を埋め込んだりした。全体の約半数に当たる[illegible]子どもが難聴になるケースが多かった。一方で子育て世代の[illegible]が原因で、耳の下の腫れや発熱が起こる。ワ[illegible]

[illegible]って対応もまちまちで、看護師が報告できずに[illegible]者への対応手引書に反映する。海外事例などの文献も分析し、[illegible]。協会の上野桂子（うえの・けいこ）副会長は「看護スタッフや施設の管理者が安心、安全に仕事ができる環境をつくりたい」としている。協会の会員の約5500事業所にアンケートをし、回答を事業所の管理者や研究者、弁護士を交えた委員会で分析する。手引書やガイドラインは、協会のウェブサイトに掲載したり、研修会で配布したりする予定。訪問看護を巡るトラブルについては、神戸市看護大のグループが2015～16年、兵庫県内で調査した結果、回答した358人のうち約半数が暴力を受けた「経験がある」との結果を公表している。全国各地で同様のトラブルが起きている可能性が高いという。 今年4月現在、全国に約9700のステーションがあるという。